

# 1 自己評価及び外部評価結果

(別紙4)

## 【事業所概要（事業所記入）】

事業所番号	2470600228		
法人名	医療法人 井上内科病院		
事業所名	グループホーム萩の家		
所在地	三重県久居井戸山町751番地1		
自己評価作成日	令和5年11月1日	評価結果市町提出日	

※事業所の基本情報は、介護サービス情報公表システムページで閲覧してください。（↓このURLをクリック）

基本情報リンク先	<a href="https://www.kaisokensaku.mhlw.go.jp/24/index.php?action=koubou_detail_022_kani=true&amp;JigovsvoCd=2470600228-00&amp;ServiceCd=320&amp;Type=search">https://www.kaisokensaku.mhlw.go.jp/24/index.php?action=koubou_detail_022_kani=true&amp;JigovsvoCd=2470600228-00&amp;ServiceCd=320&amp;Type=search</a>
----------	---

## 【評価機関概要（評価機関記入）】

評価機関名	社会福祉法人 三重県社会福祉協議会		
所在地	津市桜橋2丁目131		
訪問調査日	令和5年12月21日		

## 【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点（事業所記入）】

法人内に病院と介護老人保健施設を併設している。主治医の週1回の訪問診療があり健康管理が出来ている。また、体調の変化に応じて早急に指示、対応を受ける事が出来、安心した日々を送れている。ご家族とのかかわりも密に出来ており気が付いた事をお互いに話し合える関係性となっている。コロナ禍ではあるが日常生活は行事、レクリエーションに工夫をこらして活気のある生活が送れるようにしている。また、愛犬の存在は大きく、声をかけたり触れたりして利用者や職員の癒しとなっている。

## 【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点（評価機関記入）】

事業所周辺に母体の病院や複数の関連老人保健施設が集まっており、日々の健康管理は万全で本人・家族の安心に繋がっている。まだまだコロナ感染症の不安が払拭できず、地域交流や外出の制限には神経を使う日々ではあるが、利用者は「こけたら終わり！」を合言葉に、廊下を何往復も歩いたり自転車漕ぎをして、職員手作りの料理を「美味しいね。」と言い合って完食している。職員は食事の栄養バランスを見直したり感染症予防や避難訓練のシミュレーションを重ねて検討し、より安心して楽しく暮らせる場所になるよう支援している。職員・利用者・ペットの愛犬が家族のように和気あいあいと共に時間を過ごし、毎年目標を立てて前向きに取り組んでいる。

## V. サービスの成果に関する項目（アウトカム項目） ※項目No.1～55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印
56 職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目：23, 24, 25)	○ 1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいの 3. 利用者の1/3くらいの 4. ほとんど掴んでいない	63 職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目：9, 10, 19)	○ 1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57 利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目：18, 38)	○ 1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64 通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目：2, 20)	○ 1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58 利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目：38)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65 運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目：4)	○ 1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59 利用者は、職員が支援することで生き生きした表情や姿がみられている (参考項目：36, 37)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66 職員は、生き活きと働けている (参考項目：11, 12)	○ 1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60 利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目：49)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67 職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61 利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごさせている (参考項目：30, 31)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68 職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62 利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている (参考項目：28)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない		

# 自己評価および外部評価結果

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>I. 理念に基づく運営</b>					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	地域の中で、思いやりの気持ちをもって楽しい生活が送れるように心がけている。	理念の「思いやりの気持ち」は、全ての職員に浸透している。利用者が安心して暮らせる我が家のような場所づくりになるよう折に触れケアの見直しをして検討し実践している。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	長年、地域の方が畑で収穫した野菜を持参して施設に立ち寄ってくださる。また、買い物ネットスーパーで行っている時があるが、配達員の方とも日常会話が出来ている。	馴染みの地域の人からの野菜の差し入れは今でも続いている。また、コロナ禍であっても中学校の生活クラブから手作りの壁飾りやキーホルダーの贈り物が届き、礼状を返すといった交流があり利用者の喜びになっている。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	長年、近隣の中学校生活部の生徒から手作りの作品やプレゼントを届けて頂いている。利用者がそれぞれに受けとって感激している姿がある。その後、お礼の手紙を書くなど交流をはかっている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	令和4年度まで外部の委員は書面参加とされていたが、今年度より以前の形態に戻り全員出席していただいている。会議内では運営に対して様々な意見や感想をいただきサービスの向上に活かしている。	今年度から2か月毎に開催している。地域の自治会長や民生委員も出席し、毎回テーマを決めて研修・検討し内容の濃い会議となっている。そこで出た意見を支援に活かしている。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	コロナ禍で変化している様々な情報をメール等で連絡いただき、サービスに反映することができている。運営推進会議にも出席して頂き意見、アドバイスを受ける事でサービスの向上に繋げている。	何かあれば電話やメールで相談し、意見をもらっている。運営推進会議が開催できるようになってからは会議の中でアドバイスをもらい、サービスに活かしている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	3ヶ月に1回の委員会、半年に1回の研修会を開催し日頃から正しい知識を学び、身体拘束はしないケアに取り組んでいる。	身体拘束適正化委員会では、身体拘束の弊害について話し合い、職員同士で役割を決めて疑似体験をしたり、言葉の拘束についても言い換えの工夫を検討し取り組んでいる。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	定期的に委員会、研修会を開催し、虐待してはならない事を全職員が学び再認識してケアに努めている。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるように支援している	全職員は研修会を行い幅広い知識の向上を図っている。現在は成年後見制度を利用する方は入居されていないが、必要となれば対応、支援できる。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	管理者は契約時、十分な説明を行い理解、納得して頂いて契約を締結している。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	利用者、家族と会話を持ちサービスに反映している。面会時や定期的な電話での様子報告の際に、意見や要望を聴き反映している。	入居以来利用者に笑顔が増えていると家族からの信頼は厚い。利用者の様子を度々報告し、家族は毎月送られてくる写真入りの便りを楽しみにしている。職員を気遣う家族の言葉もある。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	毎月職員会議を行い、職員一人ひとりの意見や提案を聞く機会を持ち運営に反映している。	職員の勤務年数は長くて気心が知れている。お互いを尊重し合いながらも言いたいことはいつでも言い合える関係にある。今年度は職員会議の司会進行を持ち回りにすることで新鮮な効果を得ている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	各行事内容を把握して、必要である資金、人材等を支援してもらっており、管理者や職員が働きやすい職場環境に努めている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	法人内の専門職（管理栄養士・作業療法士・理学療法士）による研修を設け実施した。職員は資格取得のために研修会に参加した。（認知症介護基礎研修）		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	コロナ禍である為、他施設訪問は難しく、グループ内併設施設と相互活動を通して、サービスの質の向上に努めている。		
<b>II. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援</b>					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	見学面談の機会に、本人の思いを聞く態勢をとり、安心して話すことができるような雰囲気づくりに努めている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	相談、見学や面談の際に困っている事、不安な事、求めている事を十分に聴ける機会を作り受け止めるように務めている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	本人、家族にとって今のような支援が必要なのかを見極め対応に努めている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	日常生活の中で、利用者一人ひとりの個性が発揮できる場を作っている。利用者は生きがいを持ちその人らしく生活が送れている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	本人らしく生活ができるように家族と共に支援する関係を築いている。2名の利用者は携帯電話を持参して自由に家族と連絡を取り合っている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	面会の制限も緩和され、親戚や友人との交流も出来ている。誕生日等に届いたプレゼントのお礼は本人が電話を出来るように支援している。	長く面会中止の期間があったが、最近では玄関先でパーテーションを挟んで15分程の面会を許可している。携帯電話を持っている利用者は常時家族や友人とのおしゃべりを楽しんでいる。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	6名という少人数であり、家族同士のような関わりを感じている。職員は一人ひとりを把握して孤立しないように支援している。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用（契約）が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	サービス利用終了後も、家族の訪問があり交流を継続している。グループ内、老人保健施設へ入居された利用者へは面会に行くこともある。		
<b>Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント</b>					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	日々のコミュニケーションの中から、一人ひとりの思いや希望を把握して、より良い生活が送れるように努めている。	全員が思いや意向を言葉に出すことができる。やりたいことや食べたい物について皆で話し決めている。入居当初の険しい表情から笑顔が増え穏やかになった利用者がある。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	独自のフェイスシートを作成し、生活歴や暮らし方、環境を把握している。日常会話の中で生活歴など聞く事ができる。家族への聞きとりも行い協力を得ている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	一人ひとりの生活リズムを把握し、その人に合った支援をしている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	毎月の職員会議にて、モニタリングを行っている。3ヶ月毎に本人、家族、必要な関係者と話し合いを持ち、介護計画を作成している。	毎月の職員会議で居室担当が中心になって全員のモニタリングを行い、状態に変化があっても無くても3か月毎にプランを見直している。本人・家族の要望をしっかりと聞いている。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	日々の様子を細かく記録して、気付いた点をその都度共有、毎月の職員会議で話し合いをもち介護計画作成に活かしている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々にも生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	本人や家族の希望に応じて対応している。かかりつけの眼科等への受診時の対応、買い物等も支援している。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	3年ぶりに外部からの訪問（ハートフルコンサート）も開催できた。近隣の中学校との交流は長年継続している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	母体が医療法人井上内科病院であり、医師の定期的な訪問診療で健康管理が出来ている。安心して適切な医療が受られる。	母体の病院の主治医の交替があったが、利用者はスムーズに受け入れている。何かあれば看護師や医師が駆けつけてくれることで健康管理に不安はない。専門医には原則として家族が同行し場合によっては管理者も同行している。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	職員は日々の利用者の変化や状況を把握し、気付いた点は医師や看護師に報告、適切な受診や看護を受けられるように支援している。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	利用者、家族にとって今のような支援が必要なのかを見極め対応している。入院時、医師や管理者から十分に説明し安心して治療を受けられるように支援している。また、医療機関との連携を密にしている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	本人、家族と終末期のあり方について話し合いを持ち、要望に応じて対応している。医療行為が必要になった場合は希望に沿って医療機関や併設の施設と連携をはかり支援している。	入居時に事業所で出来ることと出来ないことを説明し同意書をもらうが、終末期を迎えた時にまた改めて意向を聞いている。医療行為の問題で医療機関や併設の施設に移動することが殆どでここ何年かは看取りしていない。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	独自のマニュアルを利用し急変時や事故発生時にスムーズな対応が出来るように研修や訓練を行っている。定期的に行うことで全職員の実践力が身に付くように努力している。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	独自で地震を想定した訓練を1回、水害を想定した訓練を1回、夜間避難訓練を1回、同法人の合同避難訓練に2回参加し全職員、訓練を实践する事で避難方法は身に付いている。地域の避難訓練にも参加する予定だが、コロナ禍で今年度も中止となり参加できていない。	玄関に全員の防災頭巾が掛けられていて夜間・水害・地震など様々な想定で避難訓練に取り組んでいる。利用者の防災に対する意識は強く、BCP(事業継続計画)も作成済みである。地域の避難訓練はまだ中止のままである。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援</b>					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	排泄や入浴に関するケアには、十分な配慮を心がけている。職員研修でプライバシーについての勉強会を行っている。言葉かけは常に丁寧に行っている。	利用者の話から昔よくやったことや得意なことを思い出してみんなで取り組み生きたがいに繋げている。親しき中にも一人ひとりのプライバシーが守れるよう支援している。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	利用者本人が、自分の思いを表せるような働きかけをして自己決定につなげている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切にし、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	一人ひとりのペースに合わせて職員側の思いを優先せずに支援している。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	衣服は自分で選んでお気に入りの着用している。但し、季節に応じているかの判断が難しい時は助言をしている。利用者の中にはお化粧、髪をカールする等おしゃれを楽しんでいる方がいるため継続できるように見守っている。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	利用者は食事を楽しみに毎食、完食出来ている。「食べる事が一番の楽しみ」と日頃から話される事が多いので、献立の中に希望を取り入れたり、たこ焼きやおやつと一緒に作り、楽しみを持っている。また、その日に相談してお寿司屋や鰻の出前をとる事もある。	食材は宅配サービスを利用し地域住民や家族からの差し入れの野菜で職員が調理している。食事を美味しく食べるために運動も欠かせない。お寿司などのテイクアウトも楽しみの一つである。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	一日の食事、水分量を把握してその人に応じた摂取量を提供している。水分摂取量が少ない人には水分が必要な事を説明して摂るように支援している。半年に一度、併設の管理栄養士による栄養指導を受けている。		



自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後見守りの中、口腔ケアをしている。一部介助が必要な利用者もいる。本人が使い慣れた歯ブラシ、歯磨き粉、マウスウォッシュを使用している。		
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	昼夜通して、一人ひとりのタイミングを見計らってトイレ誘導、見守りを行っている。入居時はリハビリパンツを着用していたが、トイレに行く習慣ができ、日中は布パンツに移行出来た利用者もいる。	現在ほぼ全員が自立してトイレに行くが、タイミングを見計らって声掛け・誘導し気持ちよく生活できるよう支援している。夜間ポータブルトイレを利用する1名には布団の上にタンバリンを置いて職員が気付けるようにしている。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	調理を工夫し食事の提供をしている。レクリエーションの時に体操や廊下歩行、ペダル漕ぎ運動に取り組んでいる。十分な水分補給に努め、毎朝食時に牛乳を摂取している。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	入浴日は週3回となっている。一人ひとりの入浴の希望、タイミングに合わせている。入浴中は本人との会話にも寄り添い、本人が楽しんで入浴出来るように支援している。浴室にも換気付きエアコンを設置し感染予防をしている。	週3回の入浴は一番風呂に入る利用者が入浴剤を選び、大きめの浴槽にゆったりと浸かって入浴を楽しんでいる。一対一での職員との会話も大切なひと時である。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	夜間、安眠が出来るように日中は活動的に過ごす。昼食後など本人のペースに合わせて休息をする時間を設けている。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	定期薬や臨時薬は医師の指示に従い適切に服薬の支援をしている。職員は利用者一人ひとりの薬について目的や、副作用、用法、用量について理解している。薬の変更時は、服薬後の状態を観察して細かく記録し全職員で情報を共有している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	毎日工夫をこらしたレクリエーションを提供している。野菜作りや梅干を漬ける等、昔にしていた事を行って、張りのある生活が送れている。また洗濯物を干す、たたむ、テーブルを拭くなど役割を持つ事で生き生きとした日々が送れるように支援している。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	感染予防を考えて裏庭の桜でお花見をしたり、昼食（お花見弁当）を食べたり、天気の良い日は椅子を出しティータイムを行っている。愛犬を連れて職員と散歩に出かける事もある。外食の代わりに、食べたい物の出前などを行い希望に沿った支援している。	コロナ感染が蔓延して以来外出は控えている。主にお天気のいい日に事業所周辺を散歩したり、裏庭に出てお弁当やおやつを食べて日光浴をし季節を感じている。	まだまだ様々な感染症に注意が必要であるが、状況を見ながら外の風景や社会の様子を感じられるような外出・外食・買い物などの支援の開始を期待する。
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	現在、入居している利用者はお金の所持を希望されていない。家族の考えもあり所持している方はいない。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	2名の利用者は携帯電話を持参されている為、自由に電話を使用している。他4名は希望時に職員が電話をとりつぎ、家族や友人との会話をしている。お正月には年賀状を書かれる利用者もいる為、職員が投函の支援もしている。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間（玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等）が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激（音、光、色、広さ、温度など）がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	居室は全て南側に窓があり、太陽の光が充分に入ってくる。窓からは四季折々の季節を楽しむ事が出来る。食堂の窓からは近隣の中学生の登下校の姿を見る事ができる。また愛犬が利用者、職員、訪問者を癒してくれている。	日当たりのいい食堂兼リビングは、家具や調度品が普通の家庭のように置かれ、壁には中学校の生活部の生徒手作りの壁掛けや愛犬の絵が掛けられている。対面のキッチンから調理のいい匂いが漂っている。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	ホールは窓に囲まれて明るい空間となっている。椅子やソファを置いて利用者同士、会話ができて思い思いに過ごせている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	居室には自宅から持参した愛用品(家族の写真、ぬいぐるみ、鏡台等)を置いて居心地よく暮らせるように工夫している。	居室には介護ベット・エアコン・洗面台・押し入れが設備されている。一人ひとりの要望で床に絨毯を敷いたり、使い慣れた机や椅子を置き家族の写真や手作りの作品を飾っている。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	それぞれの居室の入り口にはネームプレートを設置し、トイレや風呂場の入り口には分かりやすく看板で標示している。一人ひとりが施設内で迷い、不安にならないように工夫をした環境作りを行っている。		